

セントクリストファーネビスの夜

御宮狼

第五話

*

翌日会社が終わって、香村は、いつもと違う石段を降りていた。白い女が指定した店だ。名前の通り石でできた飲み屋だという。

扉を開くと店内は細長く、意外に奥行きがあった。長い石製のカウンターが店の端と端を横断し、背凭れのない石椅子が青を基調とする照明を受けて浮かぶように並んでいた。半袖の疲れたプレザーを着た初老の男がそのカウンターでコニャックを飲んでいた。

奥の丸い石テーブルではショートカットの女が一人で色付きの酒を飲んでいる。顔色は死人のようだ。

革バンドで髪止めをした未成年と一目で分かる店員がピッケルで氷を砕いていた。香村はプレザー男から離れて座った。男の前にはボトルとグラスと灰皿に並んで小型ピストルが置かれてあった。男は突然席を立ちピストルを胸裏にねじ込んだ。店員は濡れた掌で慌てて紙幣を受け取り、レジスターに仕舞い込んでまた氷に集中した。

ふらつきながらプレザー男は店を出ていった。

「待ち合わせですか」

「そう」

「注文どうしますか？」

「じゃあストレートでバーボン。それから」

承知したという顔で店員は下を向いた。ピアスが左の耳だけに刺さっている。

「それから幸運を少し。・・・混ぜてみましょうか？」

童顔に似合わぬ気障な科白に香村は短く笑った。

「マニュアル通りです」

言って店員は注文の品を香村の前に並べて別口のカクテルを作り出した。

「カクテルはじめて？」

「実験室じゃないって、試験管飲んでんじゃないって。お前告訴してやるって一番客怒って帰っちゃいましたよ。」

「女とガキが作るカクテル、どっちがうまいか」

「でもこのマスター大丈夫です。性転換者ですから」

「いくつ、君」

「十六」

「カクテル、うまい訳だ」

「企業秘密です」

「いい色じゃない」

香村は奥の顔色の悪い女のまえに置かれたカクテルを目で指した。

「インチキ、そのうちバレますね。バレないだろうって人だけに注文受けようかと思ってるんです。あんまりだったらプレート代わりに千円札畳んで敷きますよ」

「料理は？」

「うちは豆しか出ません。そのかわり種類は豊富です。マスターが世界中から集めてるみたいですよ」

店番はふたたびピッケルで氷を砕き始めた。ピッケルは激しく動いた。跳ねる氷の破片を見ながら香村はその日初めての煙草に火を点け、ショットグラスのバーボンを喉に流した。

*

木の実が薄い石の器にのった。掌の圧力で殻を破った。黒海オデッサでほぼ一定に保たれる年間降水量と惜し気なく降り注ぐ太陽光線によって栽培される。その実が、舌と歯でじゅうぶんに摩滅され唾液とアルコールで溶けてゆく。少し嘗め、口から出し、テーブルにころがし、匂いを確かめた。

少年の手で振られた酒がグラスに注がれ、泡立つ果実酒を混ぜてでき上がった二杯目の酒がショートカットの女の手前に押し出された。インチキの酒は堂々と色をた

たえて女と対立した。死人のような表情が一瞬うっとりとした。そして年端もいかない臨時の店主は細長く奇麗に折りたたんだ千円札をその緑色の液体に突き刺した。

「変わったマドラーね」

ショートカットの女は機転を効かした。店員と香村は爆笑した。

*

紐が漂うようにギター音楽は流れていた。傷んだ音色だ。ショートカットの女がグラスに刺さった千円札のマドラーにライターで火を点けて店を出ていった。

女の三人連れが入ってきた。三人組は奥の石テーブルを占領した。誰もが背中を開けて体を強く締める服を付けていた。落ち着きのない指に煙草を挟んで派手なゼスチャーでまくしたてている。三人ともメニューの存在に気付かない。

プールサイドで決めた女はだいぶ遅れてやって来た。女は挨拶もなく隣に座った。黙って女は酒を注文した。店番が引き箱からビニール袋を取り出して封を開けた。豆が木皿にぼろぼろと無残に落ちた。

「見たことないね」

「たしかモロッコとか言ってました。椰子の木から採れるとか」

「モロッコか」

「たしか・・・モロッコでした」

「いただきますら」

「どうぞ」

遅れてきた女が細い指で一粒摘んだ。爪は人を馬鹿にしたような紫色で染められていた。

「前歯で砕くんです。そして舌と口腔ですり潰すようにゆっくりと嘗める。じゅうぶん嘗めて塩気もかんじて、ついにお酒を入れる。煙草の苦みと実の塩さ加減とが混濁するのを待ってから少し喉へ流していき胃袋に落としましょう」

「完璧なマニュアルだ」

香村の言葉に応じて少年はピッケルを豆に突き刺し、女の笑いを誘った。

隣の女はプールサイドの優雅さとは程遠く落ち着きがなかった。火を点けたばかりで細身の煙草をへし折った。灰は散乱しただけで消えていない。葉はバニラ系の香料にメンソールをブレンドしたものだ。消えずに上昇する紫煙を通して二人の視線は衝突もしない。糸口もなく二人は酒をおかわりした。

少年は若い娘たちに偽カクテルを振る舞っている。背中の女に肩越しかから甘い赤を、横を向いた女には紫のストライプが走ったものを、正面の女の前にはジンベースのライムを絞って辛口を、それぞれ脚付きの丸底と斜辺の長い逆三角形のグラスのなかでいずれもいい色を形成した。

「ぼくからのプレゼントです」

少年の贈り物に三人組は歓声を上げ無邪気な乾杯をした。はしゃぎながら身の回りの男たちの噂話で盛り上がる。

*

4

ラムを基本として有数の偽カクテルが少年によって配合される。ラムでなくても構わない。誰もが沈黙と酒のブレンドに凝るだろう。

沈黙が無数の愛を演出し、恋人固有の酒を定義する。定義は世界中の酒場で夜ごとつくられ、二人はこっそり待ち合わせ、定義を打ち明け沈黙し、場所を変えて抱き合うだろう。翌朝になれば偽カクテルなどすっかり忘れ、夜が近づけばま

た抜け抜けとその場限りの定義をひねりだす。披露する偽カクテルに合わせて男は永遠の命題を片付けたいと念願し、あらたに軽薄の沈黙を用意する。女は絶対解けぬ宿題を真夜中見付けたいと嘘をつき、いちばん得意の微笑ではしゃぐのだ。

酒呑みたちはそして信仰深い。偽物を捧げられ疑いもせず口に入れ、インチキに酔い、その日その日の出来事の何事かを攪拌させていくのだろう。マドラーの向こう側で風景は胸騒ぎするだけだ。

偽善者は少年だけではない。

*

「彼女に最高のカクテル作ってあげてよ」
香村は勘定を済ませ、女を残して店を出た。
少年は親指を突き上げた。
「あんたまた何かやらかしたの!？」
解約された女は店番に向かって言った。

*

その夜も香村はデッサを呼び出して、寝た。
「快感だわ。都合のいい女に成り下がるのは」
「君の家ですりゃあいい」

*

5

女がいる限り、一週間には強められる曜日とそうでない曜日とがあるだろう。
だがその強弱を奴は許せない。

*

上下式の窓を降ろしてケイは頬杖を突いた。
細長い顔が電燈の光で白く浮き上がった。薄墨を垂らしたような上空を見つめ、体を乗り出した。星は完全に見えない。

二人はいつときカーテンのない窓辺で接合した。湿気と暑さで二人の半袖シャツがびしょりと濡れた。

急ブレーキがかかって銀色のバンは香村の家のまえに敷かれた砂利を蹴散らし、エンジンをかけたまま放置された。何者かが螺旋の鉄階段を上がって来るのが分かった。ドアを激しく叩いた。卑猥なイギリス語で叫んでいる。

「ふたり連れよ。すごい巻幕。だいぶアルコールが入ってる」

ノックは激しさを増した。
「知り合いなんでしょ、出てあげなさいよ。挨拶して、
追い返せばいいじゃない」
「顔見れば入ってくるさ」
「じゃあドアを開けずに不在ですって言いなさいよ」
香村は声を出して笑った。
「久し振りに私が腕を振るおうかしら」
「約束と違う」
「不満なのね。腕は確かよ」
「それは検討の余地ありだ」
「失礼ね」
「客人は大人しくしてればいいよ」
「邪魔なのね」
「調理場は立ち入り禁止だ」
「手狭なだけでしょ。どうぞお好きなようにしてちょう
だい。私も好き勝手にやらせていただくわ、偽シェフ殿」
ケイは口の端を曲げた。

香村はテーブルを整理し冷房を強めて調理場へ向かっ
た。ドアを叩く音は消えて二人連れは去った。

彼女は香村の仕事部屋に入って手頃な曲を探しはじめ
た。電源が入り、ボタンが二つ押されると鈍い摩擦音が
した。パロックが絨緞を降ろすように広がった。板張りに
置かれた水槽の魚が向きを変えた。

6

*

米を洗ってざるにのせ水気を切った。鶏と豚の肉をぶ
つ切り、鶏レバーを塩水で洗い、さっと茹でてから角切
りにした。いかの皮を剥き、輪切りにする。大正海老は
腹綿を抜き、殻を取る。白身魚をそぎ、蛸とムール貝の
殻をよく洗う。さい巻き海老の背綿と髭を取る。ピーマ
ンの種をたんねんにのぞいて乱切りにし、赤ピーマンも
また同じだ。トマトは湯剥きされたあと種を取り、てい
ねいに刻まれる。

ケイは床にあぐらを掻いて水槽を見下ろし魚の動きを
じっと見つめた。確信できるアングルを捜しているよう
だった。

「どうしたの？ 熱帯魚なんて買ってきて」

男は料理に集中していた。

「まさかフライにして食べるつもりじゃないでしょうね」

女は皮肉を言っってポップコーンを開封した。一粒摘んで水中を観察し、静かに落とした。

パエリア鍋を温め、オリーブ油を敷いた。にんにくと玉ねぎの微塵切りにローリエを加えていっきに炒める。玉ねぎの案配を見、用意の肉と魚の類を鍋になげる。さらに米とピーマンを加え、全体に油が回るまで炒めていく。

米はインディカ米だ。

*

ボールデンのマンションから盗んできたグレートフィッシュは悠然と水面をめざした。浮いて揺らぐポップコーンを魚の口が突いた。ポップコーンがほんの少し宙に浮いた。彼女が水槽に手を入れ魚に触れようとした瞬間、緩慢とおもわれた魚の動きは俊敏だった。魚がひるがえる寸前、ケイの細い指は陶磁器のように見え、光と水とガラスの屈折で拡大したまま水中から消えた。

*

パエリアはサフランの赤い粉がなければ成就しない。ブランディと白ワインを落として赤ピーマン、トマトを加え、湯と塩を加減する。煮立て、火を止める。

ワインを滔々とかけた。パプリカの匂いが皿のうえで小踊りするようだ。蜷と海老を散らしてふたたび火にかける。

すなわちパエリアは、凶暴を視覚として保持されなければならない。

ケイは魚から離れ、木製ベンチに寝そべって新聞や雑誌を眺め、料理が出来上がるまでの長すぎる時間をごまかした。

ねえ。

料理人は答えない。

男の手によって食卓に一枚の布が敷かれた。金属はいつてんの曇りもなく、グラスは照明の歩調に合わせて光をやわらかく跳ね返した。

椅子は背もたれの高いものもいい。洗いあげたナプキンは喉からさげられ、すべての貴金属ははずされる。腕時計はもっともいけない。

蝋燭は小さめを用意した。

今日は特別の日に違いない。再会を正式に祝うためでもない。香村には言い知れぬ予感があった。

*

調理場でそれぞれの動機はゆっくりと形を成していった。小指で汁をなめ、味の加減に納得し、無駄口も叩きたくなるころ、ようやく自慢のパエリアは出来上がる。味はバレンシア風のはずである。副食にラタトイユ。パスタ。豊富なサラダ。仕上げはスープ。街で買ったブレットを添えて、料理人の鮮やかな手捌きに応え、万端の食卓は準備された。

「でき上がり？」

「オーケー！」

歓声があがり、料理人はランチョンマットに金属類を平行に並べ、食卓中央に水と酒の瓶を置いた。

「だいぶ退屈してたね」

「三か月待ったんだもの」

「君の弱点は待つことが下手なことだ」

「あなたの欠点はおいしい料理に時間をかけ過ぎることよ」

弾むようにケイは言った。

「でも許してあげる。あなたのパエリアにずっと会いたくてしょうがなかった」

「光栄です。でも味は保証しない」

「あら、ご謙遜。いい匂いよ」

「偽シェフは格段に嬉しい」

「冷めないうちに早くやりましょう」

「金属をはずして」

言われるまま彼女は金色の腕輪をはずし、時計をいたわるように重ねた。

「あなたこそその汚らしいエプロン外しなさい」

それぞれのグラスにワインを注いだ。底の浅い小グラスにはヴァッカを落としマッチで火を灯した。グラスの表面から青く頼りない炎が吹きだした。彼女はグラスを持ち、卓上に置かれた香村のグラスに軽くぶつけた。

「儀式よ」

遅れて香村は自分のグラスを目元まで上げ、液体を唇に濡らした。

「上質の夜はこれから」

「乾杯は限定すべきね」

「同感だね」

香村は嘘をついた。

「今日は何へ乾杯したわけ？ タルコフスキーの人生？ イエメルダの脂肪？ 自慢の料理？ 私の忍耐？」

「新しい一日の始まりに感謝するというのはどう？」

「ありきたりだわ」

香村は肩を窄めた。

「歴史的同意を得ない乾杯なんて・・・」

グラスを持ったままケイは思案し、続けて言った。

「乾杯は歴史をつくらなきゃ」

彼女は声のない満面の笑みをつくった。

「それはいい」

二人は互いに柔順になろうとした。

「真夜中のディナー」

「誰よりも早い晚餐」

「そして二人はいつまでも乾杯できない。」

「乾杯できない」

「いつまでも乾杯できない」

「そう、そう」

「なぜなら二人には歴史が永遠にやって来ないからだ」

二人は笑いながら同時にワインを飲みほした。香村は瓶を取ってグラスに傾けた。注がれる酒は勢いグラスを溢れ、テーブルクロスの上に染みた。

「何の前触れもなく、忽然と現れ、いつの間にか過ぎ去っている」

「何、それ？」

ケイは訊いた。

「すべては途中において・・・」

「すべては途中において完結をみ、いつも終結より始ま

る。見ることはない」

香村の言葉にケイは重ねた。

「そう、歴史と歴史家はつねに、孤立し対立する。歴史は歴史家をばかにし、歴史家は、歴史を化かしつづけてゆくだろう」

言って男は短く笑った。

ケイはスティック状の人参を噛った。「いずれにしても明瞭な始まりが必要な夜はある」

「そう」

「だから人々は乾杯する。陽気に、意味を捨て、人生を捨てて」

「だから儀式は徹底して強気のはじまりがいい。強く打ちましょう。強く」

「乾杯を儀式にしたのが、そもそもの歴史家の間違いだ」

「乾杯と歴史を混同したのよ」

香村はパエリアにナイフを引いた。譲歩の気持ちを表わすように。

ケイは小グラスに掌を被せ、炎を消した。そしてグラスを手にし男のグラスを再び強気に打った。

針が零時を切った。

「明瞭で強い始まりのために！」

「こんな乾杯猿でもやるわ」

彼女は黙り込み、男はその沈黙に従った。

紫を帯びた赤ワインがすすんでいった。人参の苦味とワインの酸味が舌にしみ込んで、酒は酩酊と忘却をさそい、胃の細胞にしみわたった。

*

鍋から彼女のぶんをよそってやろうとするとケイは自分でやるわと香村の手の動きを制止した。

「音楽でも入れる？」

「好きにして」

彼女は目であやまり続けて言った。

「ごめんなさい。私、仕事のこと頭が一杯なのよ。そんなときいつもあなたにすがっている」

落胆しながらケイは水でよく洗われた青々とした山裾からフォークとナイフでクレソン草をたぐり寄せ、手前

の皿に移した。青々とした草を口へ運んで、ゆっくりと草の味を確認した。胡椒をつよめに効かした香村手製のドレッシングに頼ろうとしない。

香村は席を立ちふたたび同じバロックを降ろした。

「他人に対するあなたのやさしさはいつも分かりやすく
て、・・・私は・・・」

男は音量を絞った。

「私はいよいよ甘えてしまうのよ」

彼女は悲壮になった。

男は席に戻り、酒を胃に注いだ。指で烏貝の肉片をつまみ、口に入れた。

「出来映えはいかが？」

じっと相手の顔を見つめたあと彼女は宥めるように訊いた。

「上々さ」

「私もいただくわね」

「ご自由に」

「怒っているの？」

「どうして？」

「待ち焦がれたパエリアなんだろう。所望されよ」

「はい。偽シェフ殿」

「視覚は悪くない」

「どう？」

「まだ食べてない」

「匂いってあるだろう。どう？」

「まだ胃まで行ってない」

「料理はまず目で、つぎに鼻で、そして歯と舌で味わうものだ」

「私は胃で食べるのよ。誰が何と言おうと。全部胃まで到達してからよ。胃の細胞が決めるの。そのうち腸がウルウルしてくる。美味いか不味いかはそこでわかる」

「不感症ってことか」

「舌や鼻だけで料理を判断するのはせっかちよ」

「それは中世だ。不感症なんだ」

「やめてちょうだい」

「怒った？」

「美味しいわ」

「ほんと？ 腸が反応したのか？」

「ええ、ほんとに美味しい」

「そうか。いけるか」

「頂上のだわ」

「頂上の美味か」

「うれしいよ。成功だ！」

ケイはにっこりとした。

しばらく酒と料理を交互にやりながら、二人は互いの食いつづりを観察した。

*

パエリアに赤い牙が刺さっていた。

「甲殻類はとくべつね」

「うん」

「どうしてこうも人の味覚をそそののかしら。理論づけ
てよ。殻の内と外に、深大な世界が存在する」

ケイは牙を掴んで殻を破いた。

「形がいい。攻撃的な手足。そして色」

「こうしてると私がじっと見られてる感じがする」

「唇と舌が固い肌に触れると唾液も刺激していい気分
になる」

「ああ、甲羅の付いた蟹をいっぱい食べたくなった」

「そうして抱擁と接吻を繰り返すのか」

「そうよそうよセックスよ。疑似行為だ。甲殻類は味覚
といっしょに性欲をそそののよ」

「短小な結論！」

二人は笑った。

それから女は殻の中の汁をすすってから、肉を食べた。
顎が風を噛むようにうごいた。

「甲殻類の染み出す汁は酒とよく混じる。甲羅にワイン
を落としてすすると、これがまたたまらない」

「つい自分を見失っちゃう」

「亡命する味か！」

「それよ！ 完全主義者のための味だわ」

*

「ねえ」

女は汚れた指をナプキンで拭きながら香村の顔を覗いた。

「いつも思うけど、あなた、もう少しエレガントにやれないの？ その肉体が台なしよ。美味しいお酒も興冷める」

男は女の顔を正視し、深くおじぎをした。

「家畜」

「……」

「まるで家畜。畜生よ」

「家畜は与えられたものしかありつかない。それも贅沢になるばかりだろう。肥え太るのが落ちだ」

男は鳶色の腕を食卓につき、酒を煽った。ムール貝から肉をとり出して口に入れ、よくよく咀嚼し、肉片の歯応えに新鮮さを確認した。その姿は醜悪だろう。背中を丸め、首が異様に前方へ突出する。

顎はさらに突き出、喉全体の筋肉はまるで一匹の飢えた食動物が棲んでいるかのようだ。

両腕が食卓を激しく動いた。執拗に獲物をさばく。口の開きは野卑、人より豊富な唾液のためにピチャピチャ音が立った。歯は獲物に合わせ柔軟に牙を向いた。

「不服？ それじゃあ獣ね。優秀な獣だわ、あなた。テーブルを這う獣よ。餌を探してすべてを犯す」

「光栄だね」

「テーブルに上半身をせり出し、顎はハイエナ。どこまでも貪欲で、闘争的で、今にも噛み付くような眼。獲物にありついているときのあなたの眼は、異常よ」

「さらに僕の栄光だ」

男は水を少し口に含んだ。黙々と顎を動かし二本の金属をパエリア鍋のなかで戦わせた。肉を刻んだ。

「食べてるとき、あなたの華麗な体はいったいどこへ行ってしまっているのかしら？」

男は右手のナイフで肉片を転がした。

「どこへ消える？」

ケイは慎重に尋ねた。

「何かに撃たれたように食べるあなたの姿を見てると、私はとても自分が小さくなってしまふ。……」

女は男の舌の動きを見届け、決意したように席を外した。男はカラカラの喉に水分を補給した。

*

ケイは皮革の鞆からネガの束を取り出し、黙って食卓に無造作に置いた。喧嘩を売るように。そして起立したまま香村の顔を見下ろした。

「二月のマニラ」

放り出された束をまじまじと見、男はナイフとフォークを傍らにやった。ネガを蠟燭にかざした。

群衆が走り、カブト虫のようにひっくり返ったジブニー。炎上する戦車。街で絶叫する女。指を指す老人。マラカニアン宮殿。大集会。黄色いTシャツを着た群衆。歌手がL字の指サインを天に示している。報道記者。ナボタスのあばら屋。スモーキングマウンテン。パテリオ達の賭け事。夜のマビニ.....

女のフォトジャーナリトとしての執念が膨大なネガに焼かれてあった。

反政府ゲリラとの接触。テレビに映ったマルコスの横顔。革命前夜のマニラ市内。逃亡した大統領。残された独裁者のブリーフ。イメルダのハイヒール。口紅。大統領官邸。浪費を尽くした宮殿内。

吐き捨てるように男はネガをテーブルに置いた。それから席を立ち、底の見える酒瓶を片づけ、冷蔵庫から新しく白ワインを取り出して女に渡した。

「赤から白か。邪道ね」

「酒呑みに王道があってたまるか。降参のしるしだよ」

「この期に及んで皮肉を言うのね」

女は栓抜きを握り腕を組んで考える仕草を見せた。

「ドイツワインか」

「多士済々の白ワイン。ボトルの色と堂々とした風格がいい。味は保証できない」

「リースリングか。安心だわ」

*

女は硬いコルクに向けて意志を刺した。意志は螺旋状に静かに貫かれていった。女はコルク栓を開けた。

*

「ひとつのパターンがある」
言って男は着席した。
ケイは身構えた。
「君はレストランに行くとき必ず、こうやってメニューを開きながら、何か変わったものないかしら、という常套句からはじまる」
女は胸のボタンを一つ外してから立ったまま男への酒を注いだ。
女は全体を察知しようとしている。
「あなたの招きには定型のコースメニューがない」
「客人に合わせるんだ。」
「嘘。招待される者は何を差し出されるかわからない。今日も私は幸福だったわ」
「恐らくはね」
「でも未来永劫にわたって私は不幸よ」
「どうして？」
男は新しい酒を口に入れた。
女は答えない。
「僕のディナーにメニューは存在しない。後ろめたい能書きが存在するだけだ」
「私の写真は、言い訳というの？」
「突き付けてくる」
「突きつける？」
「見る者の想いが向かっていけない。押し寄せてくるばかりで、想像への発端もない。何だか首を絞められてるかんじだ」
「.....」
「我慢ならない写真家の魂胆が透けて見える」
「根拠は必要よ」
「そんなものこそがない」
「.....」
「何もかもが理知的で、過不足のない構成でつくられている。しかし完成された絵をご覧よ。構図のなかで被写体はひどい拷問を受けている」
「拷問？」
「君のシャッターは絵の首を絞め殺しているようだ」

「殺し？」

「だからシャッター切る瞬間、被写体は怯えきった顔になる。まるで迫害だ。遠近感が消滅してる」

男は続けた。

「アイリスを絞りすぎるんだ。技術の話じゃない。全体が不断の緊張で押し切られてる。動態は無用の突起物だ。そして饒舌に化けたストイシズムの地平だけが現れる。蜂起したフィリピン民衆のパワーがばかげた構成力でつぶされてる。被写体に自白を強要するな。無実を殺すな。・・・」

ケイはネガを掴み、後ろの長椅子に投げつけ、パロックが邪魔だという振りをした。

男は少なくなった草を素手で摘んで食べた。

女もフォークで同じ草を食べ出した。ネガが椅子からずれてスローモーションで落ちていった。二人はしばらく何も言わず黙々と食べつづけた。

*

1

「ねえ。食卓難民のキミ」

「・・・？」

「キミは食べながらいったい何処へ行ってしまう？」

写真家は意地悪な眼で訊いた。

「消えた後、何処でどうしてるか、私が教えてあげましょうか？」

男は女の顔を見ない。

「あなたもじつは」

飲もうとした酒をテーブルに置いて女は続けた。

「そうやって、あなたも、じつは仕掛けるのよ。私がシャッター押すスピード以上の速さでカシャリカシャリやっている。そうでしょう？ 世界に向けてね。そうでしょう？」

男は女の唇を見、すぐに眼をそらした。副食の腹にフォークを入れナイフを引いた。

「だからチャンスは逃さない。いつも目を吊り上げて、旬を読み、世界を睨んでる。舌先ですすってる。容赦なく、徹底的に。世界の全体をね。前触れもなく、現れて、説明もなく、消えていくチャンスに余程寛大なんだ。あ

るいは自信過剰の馬鹿か、楽道家。料理をまるごと喰りながら、それでも喰い足りなくて、照明だの、調和だの、デザインだの、韻律だの、時代と寝るだの無粋だの言ってる。形式を馬鹿にして形式を遊ぶのか、たいしたものね。フォークを刺しながら空白をジャリジャリやってテーブルクロス汚して、それで口拭いて、喰べては借りをつくり、喰べては借りをつくり、たっぷり酒浴びて、悪態の限りをついて、自分を追い込んでいる。繊維の入った時間をまるごと喰りながら、ね」

ケイは煙草を取り出した。

「まるごと喰りながら、饒舌で誑かせ、背景を探り、料理の山裾から、世界を予見している。それが、あなたよ」
砂の音がした。

*

「いっそグラスの淵を咬み殺してごらんなさいよ。ナイフを立てて、フォークを突き刺して、平々凡々を遊戯して、あなたこそ殺害を考えている。殺意もなくでどうしてそんな食べ方できるでしょう。最終の目的言ってご覧なさいよ。回りを全部殺して最後は自分も殺して食べる。何を殺すの何を食べるの。飽きたら他人の知らないテーブルクロスを捜しにまた遊びに出かけるんでしょう。迷子の顔付きして、その振りしてるだけで動いてもいない。クロスに用心深く、料理にありったけの諧謔を振りかけて、甘いと辛いと苦いと、アジアやフランスやスペインや思想も哲学も、一切がっさい表現やら技術を体に通過させてる。滋養じゃない。ただの舌先の媚薬でしょ。憂鬱と歓楽と、世界の絶対温度を楽しんでいる大いなるペテン師。最悪の」

男は煙草を用意し、マッチを擦った。棒は折れ、新しい棒が擦られようとした。

「最悪の、最低の神経」

男は女を見ていない。

「いつも隈無く、ぶ厚い粘膜の舌鋒で、世界全体を挑発してすする。全身が獲物を捕獲してそれはとても鋭角的だわ。素材そのままに、最大級のジョークを効かして、食べる。食べる食べる。食べながら飲んでまた食べる。

世界に微笑し、滑稽をたくらみ、そしてまた食べる。そうでしょう？ ビタミンの愚昧を指摘して、皮下脂肪を敵、暇を悪徳、それこそを唯一の法典として、つねにユーモアに余念がない。そうでしょう？ あなたの企みは見え透いている」

「そうして君は、世界システムを皮肉り、完結させる。世界の首を掴んで、掴んだ気分になって、シャッター切って、世界を凍らせてしまう。豊かな原野も君のレンズに捕まると一瞬にして不毛の地になる。そして君はいつものように禁欲と慰めの繰り返しだ。レンズの向こうは君の指程に単純じゃない」

男は水で唇を湿らした。

「そして最後に君は、個人だ。僕は」

フォークを彼女の顔に差し向け、男は喋りつづけようとする。

「僕は何だってやる。美食家じゃない。何でも喰れる。何でも飲ける。そして何も残さない。美食家はあらゆるものを残したがるだろう。贅肉や余裕や名声や権威も、自尊心すら剥製にしたがるだろう」

「ええ、あなたは何も残さない。残さないわよ。とてもお利口だわ！」

女は両手で顔を覆って食卓に肘を付いた。

男は黙り込んだ。おそらくは残せない。残すのが怖いのだ。恐怖を口に入れ、胃に溜めこむ他術がない。他人より濃い消化液が翌朝になればすっかり消滅させてくれるだろう。胃袋は空になる。

だがそれでは終わらない。またたらふく食べる。それは不安なだけだろう。不安でたまらないから食べる。残すのはいやだ。食べなければいてもたってもいられない。肉や繊維は恐怖を増殖するだけだ。何でも喰りながらじつは何も喰れていない。

「女々しいからよ。徹底的に、臆病で、心細くて、不安で、いてもたってもいられないほど、女々しいからよ。女々しくて、女々しくて、女の胸に抱かれて、ふくよかな山の谷間に顔をうずめて、うすい涙流して、唇で、・・・唇で味覚を・・・。その唇でありったけの母性を吸い続け、性懲りもなくまた世界中の料理に唇寄せていくんでしょう」

女は正しかった。男は微量の水で口を濡らし、白ワイ

ンを飲み、副食を征服しようとする。完全に。
女はなおも喋り続けようとする。そして泣きはじめた。
男は聴いてはいない。

*

何もかもうまくいっている。だがそれは表面だけだろう。取り繕った嘘に近い。男の顔には皺もなく、誇れる傷も見当たらなかった。何もかも近く何もかも遠い。うすくしろい乾ききったアスファルトを当てもなくどこまでもどこまでも永遠に歩きながら、観念や思想や納得や疑念やシステムも記号も、自分の証明らしきものまで、いっさいを食べてきた。あらゆる事柄を咀嚼し、経過と因果を消化しようとする。困難を分割し、世界の意味付けを図る。だがそこに、食べる振りをして通過させた男の欺瞞の顔があった。腹は脹んでいない。消化不良だ。何もわかっていやしない。

平然と女を買い、女に買われ、恋や眩暈や不安を美辞麗句でごまかして片づけようとする。日に一食大量の餌を口に運び入れ、摩滅し、かみ砕き、二十四時間唾液も消化液も枯れることはない。歯もガタガタになり、漸動運動にもくたびれ、それでも食いたりなくて街を徘徊する。男は消化することができなかった。孤立だった。それは世界に順応できない男が人間を拒絶するように食べるということだった。

「食欲も欺瞞ね。言い逃れ？ 自己納得？ ひたすら世界を遮断しようとする防衛の、女のような本能でしょう。食べることであなたはますます孤独になっていく。私はシャッターを切ってきたわ。顔をどこかにうずめることもなくね」

女はゆっくりとナプキンで目頭を押さえ、口を拭き、食卓を立った。壁際の肘掛け椅子に女は腰を沈めて脚を組んだ。

「私は選んできたわ。ひとつひとつ」

男はバスケットからブレッドを取り出し、程よくちぎった。魚の腹にそっとフォークを入れて、ナイフで小さく切った。肉片をパンにのせて口に入れた。よく咬みながら右手で野菜をたたみ、魚の下に敷かれた汁を付けて

口に入れ、また咬んだ。

顔を上げ正面を向いた。カーテンのない窓にビルの青い安全灯が揺らいでみえた。外は今夜もまた熱帯夜だ。

女が煙草に火を付ける音が聴こえた。

「全部ファインダー越しに、私は、私を取り囲む周囲を、世界を、ズタズタに切り刻もうとしたのよ」

男はアスパラを両手で征服している。

女は男の横顔へ畳み掛けている。

「ファインダー覗いていれば神は語りかけてくるとでも言うの？ 選ぶことは際限のない狩猟よ」

女は気付かれぬように小さく溜息をついた。それを男は見逃さない。

「シャッターを切る。それでも私はシャッターを切る。だけどレンズの先はいつもあさましい観念の幻影にすぎない。シャッター切ったあと残るのは、そうだわ、いつも後ろめたい連続の摩擦音だけだ。鼓膜が破裂するように痛い。本当に痛いよ。そして自己嫌悪に陥る。ネガは私を苦しめる。膨大なネガを火で焼きたい。焼き殺して楽になり、私を解放するのよ。でもできない。ネガは一枚一枚、私の首を絞め殺しながら生まれてくるのでしょう。殺されるのは私の方だ。そうでしょう、ねえ。私は殺される。だから私は耐えなくてはならない。窒息するほど苦しくても。そうでしょう？」

ケイは不屈の意志で喋りつづけた。話の脈絡はとうに失われている。

皿に残った最後の葉にアスパラを包み口に入れた。男の歯に茎と葉と砂が混ざった。水を飲んだ。

砂は落ちていかない。

*

安ホテルと割れた灰皿。満月の被告席。捨て猫と看板。乳房にかかるナイフ。・・・ディテールよ。ディテールなのよ。子供。老人。死？ 決裂。キュービックを遊ぶ子供・・・、民主主義。プラスチック爆弾。システム？ そうよシステムよ。結末のない短編。フットボール。楕円形の夢。証明より存在より、位置？ 自我？ 差別？ あなた？ わたし？ エンジンが泣いてる・・・嘘つき。

謎をつくる？ 愚かな女？ 断片は女によって切り落とされるの？ ピンセットで拾って組み換える現実、男はジグソーを遊ぶの？ 選ばれてゆくことでしか世界は成立しないの？ 断片に意味はあるの？ ないの？ ガラスの破片は世界を写すの？……・

ケイはやり場のない気持ちを捨てるように煙草の灰を灰皿に落とした。険しい目だ。

「ね？」

女は香村の顔を覗いた。

「聴いてるの？」

「ああ、聴いてるさ」

「嘘ばかり！」

男は救いようのない笑いを作ってそれぞれのグラスに白ワインを注いだ。そして女を食卓に誘った。スパゲティ食べようよ・・・、きっと美味しいはずだ。

女は応じてベンチを立った。

鱗、頭、腹綿を除き、小骨を取った鰯の身とスパゲティの混成。ソースはオリーブ油をベースに薄切りの玉ねぎを炒め、レーズン、松の実をしたがえ、アンチョビーとサフランが控える。

二人はふたたび食事に集中した。

水をたたえたグラスが汗を掻いていた。

フォークを刺し軽く静かに回転させた。押さえのスプーンは使用しない。フォークで魚の身を捕らえ、皿のへりで汁を追い金属の谷へ乗せた。これにパスタを寄せ、谷の中でまた回転させた。塩けを含んだスパゲティに鰯の身が口のなかでよく混じりあった。唇を水で湿らした。

男は料理に感謝した。

*

口。それが基本だった。小さくて絶対の基本だった。

断片の寄せ集めに過ぎない女の世界が男の口を通過していく。信じられるのは口だけだった。断片は口に運搬される。分解され、味覚に変わり、認識がある。分子化がはじまって、排泄と体内組織化を辿る。

写真家は選んだ。男は選ばない。辱めを受けた女は裸体のままでも闘うだろう。男は偽装し、逃げてゆく。写

真家は世界中を取材し自分を見失っている。

腫れ上がった唇と干からびた食道は水を欲しがる。血も枯渇し、胃袋の異常をごまかしながら男は狭い円形の食卓に逃げていく。そして二人はしずかに発狂するのだ。二人は同罪だった。

*

女は選ぶ。男は選ばない。そうではない。重要なのはそれだけでは分からない。スピードは撮れるか。匂いはどうか。………